
15 野ウサギ

イギリスの郊外をドライブしていると、たくさんの小さな動物が、道で車にひかれて死んでいる。いちばん多いのは野ウサギで、スコットランドの田舎などでは、数十メートルおきにあるといってもよいほどだ。ある本に、イギリス全体で1年に1万匹のハリネズミが交通事故にあっていると書かれていたが、野ウサギの場合はその百倍をこえるかもしれない。私の5歳の娘は、こんなに死んでしまって、まだウサギさんは残っているのかしら、と心配していた。だが、道の脇には、ものすごい数のウサギ穴が見える。

知り合いの考古学者によると、ウサギは考古学者の友達であり、敵でもあるらしい。ウサギが掘り出した土にまじる土器などから、遺跡のおおよその年代が、掘らなくてもわかる。穴の中をのぞきこむと、石造りの建物の一部が見えることさえある。ウサギ穴を注意深く観察するだけで、ある程度研究を進めることができるのだ。しかし、最近では、どちらかというとな敵と見られることが多い。なにしろ、遺跡にもものすごい数のウサギ穴が掘られていて、せっかく発掘をしても、一面ウサギ穴だらけということになりかねない。そのため、ウサギの被害から遺跡を守るための発掘調査が、あちこちでおこなわれはじめている。

野ウサギは、適度にやわらかい土を好む。いくら穴掘りの得意な彼らでも、堅い岩盤を掘り抜くことはできない。逆に、あまり土がやわらかすぎると、うまく穴が掘れないのだろう。ピーター・ラビットも、たしか大きな木の下、砂っぽい土の中に住んでいたはずだ。遺跡の土のように、いったん掘って盛ったあと、何百年、何千年とたっているような所が最適らしく、まるでねらったかのように、そういう所に穴が集まっている。土盛りの中に石を積んだ建物の跡が残っていたりすると、もう彼らにとって、最高の居住地だ。餌は草だから、食料不足の心配はなく、天敵もあまりいないようで、どんどんふえていく。旅行者にとっては愛らしい存在だが、土地の人にはかなりうっとうしい存在のようで、庭に入ってくるウサギを防ぐ方法はあるだろうかという質問に、猫を飼いなさい、というアドバイスがのっていた。

もちろん、野ウサギは昔からいたが、遺跡の被害がこれほど深刻になってきたのは、最近のようだ。その理由は、最大の天敵が嗜好を変えたためだろう。



うさぎ穴だらけの遺跡 (年撮影、著作権フリー)

つまり、イギリス人がウサギ狩りをやめて、動物の保護者に宗旨替えをしたからだ。かつては、キツネ狩りをはじめとして、狩りが貴族のスポーツだった。いまや、肉を絶つひとが増え、ウサギの肉をパイに入れるなど、まれなことになってしまった。そんなわけで、野ウサギは、天敵の恐怖がなくなり、どんどん数を増やしているわけだ。

しかし、自然の動物を、分け隔てなく保護することはむずかしい。あの垣根をのそのそとはいまわるヘッジホッグ（ハリネズミ）も、野鳥の卵を食べるといことで、一部では評判が悪い。庭にやってくるかわいらしいリスも、木の皮をはぎ、森を傷めるといことで、害獣だという声もあり、論争になっている。野ウサギも、あまりに増えすぎると、今度はその天敵が増えてくるかもしれない。

それでも、しばらくの間は、野ウサギが減ることはないだろう。おかげで、私たち旅行者は、遺跡に行くと、たいへん可愛らしい姿を楽しむことができる。しかし、貴重な遺跡から、おだやかな方法で野ウサギに立ち退いてもらうことは、はたしてできるのだろうか。イギリスの考古学者たちが、どんな方法を考

えつか、申しわけないが、楽しみと言わざるをえない。

1996 新納泉 著作権フリー